

「文明の災禍」に学ぶ

——3.11 原発事故が問いかけるもの——

哲学者 立教大学大学院教授 NPO 法人森づくりフォーラム代表理事 内山 節

1. 近代・現代世界の非合理的構造

私は今回起きた福島原発事故をきっかけに、これまでつくってきた文明自身が、文明を破壊する時代が来たという思いを持っています。今日これからそういうことを考えていく上で、近代という時代の出発点にあった1つの論争を、初めに紹介しようと思います。

1700年代の終わりぐらいですけれども、イギリスのマルサスという経済学者が『人口論』という本を書きました。今でも文庫本にもなっているロングセラーです。何が書いてあるかというと、文明の発展は人口を増大させる、しかし人口が増えていってもそれに比例するだけの食糧が増産できない、いずれどこかで限界が出てしまう、いずれこの社会は食糧危機に陥る——という内容です。当時の文明の発展を謳歌する風潮を批判して書いたこの問題は、結局自然は有限である、自然を拡大することはできないということです。

ところが資本主義という生産方式では、絶えず拡大し続けることが正常な状態です。絶えず市場で非常に厳しい競争をしながら、勝ち抜いていくという経済システムが出来上がっています。そこでは、生産のための技術も、よく言えば高度化していく、効率が良くなっていくということになります。その結果、働く人間の数も絶えず減少し続けていくということになってきます。資本主義というのは自らを改革しようとするほど、片方で失業者を増やしていくという負の側面を拡大してしまい、それが社会不安を起こしていくという仕組みを持っています。それでもなお社会を安定的に存在し続けるために、絶えざる経済拡大のみが失業者を吸収し続けるのです。

まじめに考えれば、誰が考えたって、地球そのものが有限であり、自然が有限である以上、人間だけが一方的な生産と拡大を続けるというのは、どこかで無理が来るに決まっています。そういうことは分かっていたわけですが、この議論は、どういう方向で落ち着いたかということ、自然は無限に存在すると仮定するという、非常に暴力的な結論で終了することになったわけです。

しかし、仮定をつくったって、誰が考えても自然が無限であるとは言い難いわけです。そこでこの矛盾を回避するのは科学であるという形で、科学に丸投げさ

れることになったのです。科学の発展がこの矛盾を解決するという前提に立ったということです。

実は近代の合理主義というのは、非合理的ものの承認の上に成り立っているのです。つまり、自然が無限に存在するという非合理ですね。これを承認することで、無限の経済発展の理論が出てくるわけです。その次には、それが無理だということになってくると、すべての矛盾は科学が解決するという、そういう非合理です。それを人々に承認させることによって、また次の合理性みたいなものを確立していく。だから合理主義というのは、すべてに対して合理的であるのではなく、全体のところではそれを承認させるための非合理というものが絶えずあるということなのです。

2. 社会における合理性と非合理生

それは今回の原発事故が起きてみると、全くその通りだったわけです。原発は適切に運転すれば、安全に運転するという非合理を認めることによって、実際の原発というものが肯定されて、ある種の合理性を確立するという定義です。ですから、決して合理主義というものは、すべて根っこから、頭の先っぽまで合理的なわけではなくて、全体のところにはとてつもない非合理があるというふうに思わなければいけない。そのところを無条件で承認させることによって、結局今の社会は成り立っているのです。今の社会は原発に限らず、経済も教育もすべてそういう構造だろうと思うのです。

ヨーロッパに行きますと、消費税は大体前から20%程度でしたし、最近では23%ぐらいまで上げている国が次々と増えてきています。これは今までのままでは資本主義が安定的に利益を上げられなくなってきたと言ってもいいわけです。国の収支を回復しようとする、出すものを減らすか、取るものを増やすかです。生活者の感覚では、これに賛同する人というのは恐らくいないでしょう。しかし国が破たんしたら、すべての人たちが破たんに追い込まれていくという前提があるわけです。その時一番怖いのは、強度のインフレです。日本の経済規模からいうと、3年間で100%ぐらいは十分にあり得るとします。高度成長期だったらいいのですが、今国にお金がない状態で起きていった

場合、恐らくインフレ補てんができません。そうなる
と年金生活者などはもう破たんするしかないという現
実を作ってしまうわけですが、こういうことがありと
あらゆる場所で起きるでしょう。何が何でも強度のイン
フレだけは阻止しなければいけません、そのため
には円の信用力を高めるしかないというのです。今、
円の信用力は、国際問題も絡めて、何かのきっかけで
破たんしかねないという状況にきているので、取りあ
えず現状で収支均衡を図らざるを得ない。結局国の経
営者としては、こういう論理で動かざるを得ないわけ
です。そうすると、増税とか、いろいろな社会保障費
の切り下げとか、いわゆる先進国が今頻発してきてい
ることになってきます。

一方生活者というのは自分たちで働いたり、生活を
つくったり、コミュニティをつくったりして生きてい
る人たちです。このように国の経営者と生活者という
立場は、本来全く違うものなのです。ところが、戦後
社会を経ながら、今多くの人たちがその区別のつかない
生活、非常に国への依存度の高い生活をしています。
つまり自分たちの自立的なコミュニティを持っていな
いし、何かあったら助け合う世界も持っていない。そ
ういう状況の中で破たんが起きてくると、国の破たん
はイコール、すべての人々の破たんにつながってしま
うわけです。問題はここを直すことなのです。

3. 東日本大震災以降のコミュニティからの発想、地 域からの発想

私も東日本大震災以降、私たちにとってはコミュニ
ティの重要さもよく分かったし、地域というものも、
いろいろな形で再認識されていくことになったと思
います。地域というのは、自然や人々や歴史や文化など
さまざまな関係が網のようになってでき上がっている
ものであって、決して1つの場所というか、単なるエ
リアみたいなものではありません。そうすると今度は、
もし地域というものが、関係によってできているとす
るならば、そこに住んでいなくても、その関係の中に
加わってくる人というのは、地域の人ではないかとい
う言い方もできてくるわけです。これが3.11以降非常
に活発になってきたという気がしています。繰り返し
繰り返し現地に行って、その関係の中に少しずつ加わ
っていくボランティアの人たちなどは、離れていてもや
はり現地の関係の中に生きています。

私自身は、いろいろなNPOなどに加わっているの
ですけれども、皆さんが非常に熱心にやっていて、絶
えずたくさんの活動報告をいただきながら一緒にやれる

ことは一緒にやっていると、去年の夏ぐらいから、経
済をどういうふうにも復興させるかというのが非常に大
きな課題になってきました。やはり経済が少し回り始
めないと、地域の復興といってもなかなかそううまく
はいきません。しかしそれと同時に、経済というものを、
それぞれが収入を得ていくために行っていく経済とい
う価値よりも、遠隔地の、例えば都市の若者なども加
わりながら、共に生きる経済やコミュニティがつくれ
るかということを考える傾向が非常に強くなってきま
した。そういう点では、新しい動きというものがある
いろいろな形で出てきています。

近代社会が作っていた1つの虚構、つまり科学とい
うものに絶対的な権威が与えられ、そして国家とい
うものにやはり絶対的な権威があります。私たちは政治
というものを絶えず批判するけれど、やはり今の仕組
みというのはすべて国家承認の上に成り立っているわ
けです。そう考えますと、脱原発だけではなくて、脱
国家というものも必要になってきます。もちろん、脱
資本主義というか、市場至上主義社会からいかに出る
かも含まれます。そういうあらゆるものを絡めながら、
今私たちは3.11以降の社会をどう作るかということ
を議論していかなくてはなりません。

つまり近代以降の社会が持っていた、冒頭の言葉
を使うと、ある種の非合理の承認の上に成り立っている
部分をきちんと見据えて、そこに組み込まれていかな
いような仕組みというものを、自分たちでつくって
いくことが必要になってきていると思います。

4. エネルギー自給を模索しはじめた地域の動きにつ いて

私のいる群馬県上野村というのは人口1,400人弱
ぐらゐの山また山で、8月になると日航機が墜落した
ニュースが出る村なのですけれども、村の中に温泉施
設があります。温度が低いので、加熱用に木質ペレ
ットを作っています。最近このペレットを利用して発電
できないかなということで、太陽光発電のように超小
型ペレット発電機を1軒単位で設置できないかと考
えています。もし仮にすべての家で発電をしていくとい
うことになってくると、その電気を集落でつないで、
余っている人が足りない人にあげる。逆に自分が足り
ないときはもらうという、集落内の貸し借りの中に電
気を組み込んでしまうことができます。そうすると電
気は買うものということじゃなくて、お互いにあげ
たりもらったりするものになります。取り組む一番の理
由は、原発問題はもちろん念頭にありますが、それ
よりも、外の強大なものに依存しながら、自分た

ちの生きる世界や地域社会ができていう形を変えたいという思いが強くなります。考えてみれば、電気は東京電力ですし、村なんていうのは、財政でもいろいろな点でも、本当に国家ががんじがらめにされている。そういう状態から自分たちの地域、自分たちの生きる世界を自分たちで再創造する。そのときにはどうしてもエネルギー問題には取り組まざるを得ないという現状があります。

5. 安全性の議論で終わらせるのか、社会の改革か

私も、原発から出てくるものはもちろん安全だなどと思っていませんが、しかし原発問題を安全か、安全ではないかというところで終わらせてはいけません。最近調べた岡山県のマツタケから10ベクレルが検出されました。福島原発事故の影響は考えにくく、今までは誰も調べてこなかったわけですが、なんらかの影響で10ベクレルぐらいは前からあった可能性が出てきたというのです。

つまり今の私たちというのは、そういう時代に生きていて、当然ながら放射能以外にもさまざまな危険物質に包まれて生きていくような生き方をしているわけです。放射能だけ取り上げてどうこう言っても始まらないという気がしています。もちろん、小さいお子さんや、まだ成長が続いている人とか、それから、これから出産される可能性のある方というのは、それは極力神経質になったほうがいいと思います。私が言いたいことは、安全かどうかだけで議論しても仕方がなくて、冒頭から申し上げているような、近代世界というのは合理的にできているような顔をしながら、実はその奥に、無条件に非合理的なことを承認させている在り方をきちんと見ることで、この社会を権威付けさせて暴走させていく科学と国家のくびきからどういうふうになるか自由になっていくかが課題となります。もちろん科学を利用してはいけないと言っているわけではありません。マルサスの時代から始まった、すべての課題を科学に丸投げさせて、それで科学のほうを権威付けさせてしまう構造からどういうふうに出ていくのかという問題です。それはまた、国家に対する、至る所で依存しながら生きていうか、国家と私たちは、いわば共存共栄ならまだいいですけども、これからの時代というのは、共倒れの時代という方向に向かってしまっているわけです。そうすると、国家に依存しない生き方、つまりわれわれ自身の生きる世界の再構築、それをやっていかないとはいけません。そのときに、例えばその単位になっていく地域というものも、むしろ関係としてとらえ、その関係の中に外の人も加わっ

てこそ、その関係は強化されている。そういうことが非常に多くの場面であり得るということが、今度の3.11以降でも分かってきたと考えます。

6. まとめに代えて

もちろん少しでもいい国家のほうがいいかもしれませんが、けれども国家に依存しない、少なくとも国家の権威を地に落とさせるような生き方をしなければいけません。そのためには結局自分たちの自立的世界をつくる必要があります。それを今私たちはコミュニティと呼んでいたり、共同体と呼んでいたり、新しい意味での地域と呼んでいたりします。そこに持続可能な未来の基盤をつくらなければいけない。こうした社会の大改造という非常に大きなテーマを念頭に置きながら、3.11以降を問うているというのが今の動きではないかと思っています。

私自身は、被災された方には大変申し訳ない言い方ですけども、むしろみなさん元気になっていると感じられるのです。そうすると、その中で、この社会は何とかなるかもしれないという気持ちも出てきました。一方で既存の仕組みでいこうとすれば、さっき話したように、消費税はいずれ20%ですとか、社会保障を切り下げるのは覚悟してくださいとか、結局そうとしか言いようがない世界があります。しかし全く違う、新しいわれわれの生きる世界をつくるんだという、そういう躍動感も同時に出てきているというのが現在だというふうに私自身は思っています。



内山 節 (うちやま たかし)